
～IS～転生？蘇生させろ蘇生！

鬼巫女12P（個人的にはアリ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＼IS＼転生？蘇生させろ蘇生！

【Nコード】

N8139Z

【作者名】

鬼巫女12P（個人的にはアリ）

【あらすじ】

何て言うかさ……………ホントゴメンね

プロローグ？（前書き）

この小説を読む前に

★この小説は、二〇二〇動画の歌い手様達がお好きな方々に不快な
思いをさせてしまうかもしれません。

それでも「いいぜ」の方は楽しんでって下さいな

プロローグ？

俺は、死んだ……………。

まあ、事故死とかじゃなくて病死。享年22歳。

未練は無いと言ったら嘘になる。

自慢じゃないが生前、俺は【星屑】と言う名の歌い手としてそこそこ有名だった。

まだ、歌いたかったし楽器も弾いていたかった。

だが、コレも俺の天命なのだろう……………受け入れなくも「……………あのく歌い手の星屑さんですか？」……………ゑ？

突然、後ろから声がした。

振り返ってみると、女神という言葉がピッタリ当てはまる美しい女性立っていた。

「う、美しいだなんて……………／／／／／／／／」

「ん？声に出してたか？」

「あっ……………すいません…私、読心術が使えるので」

「ほー……便利だな」

俺が言うとは女性は目を丸くした。

「あの……怖くないんですか」

「いや、全然。寧ろこんな綺麗な女性に読まれるなら嬉しいと思うぞ…俺は」

「／／／／／／／／／／」

顔を真っ赤にして俯く女性。

何か言ったか俺？

「ゴ、ゴホン！それより貴方に言わなければならない事があります」

あっ復活した……

「貴方が死んだのは私のミスです！ごめんなさい！」

「へえ……そう」

「……………」 ↑女性

「……………」 ↑俺

「……………それだけ…ですか？」

長い沈黙の後に女性が尋ねる。

「まあ、大袈裟に反応したところで死んだことには変わりはないかな」

此処でいくら騒いだり喚いたりしても『死』は『死』。

コレはどう足掻いても覆らない。

ならば、この運命を受け入れた方が楽でいい……………。

……………現実逃避じゃないぞ。

「ところで質問いいか？」

「はい、何ですか？」

「何で俺が【星屑】だって知ってるんだ？」

「あつ、それについては少し長くなるので……此方へ」

女性が手を指した方を見ると……其処には…

「……………ちゃぶ台？」

「ハイ！和が好きなんです」

……………一言……言わせてくれ
……笑顔が素敵です……

「では、改めて…私はゼウスといいます」

「歌い手の【星屑】、改め二階堂 龍夜だ」

女性……ゼウスが深々と頭を下げる。ゼウスと言えばギリシャ神話に出てくる最高神として有名だ。

最も俺はゼウスの事を髭のモッサリ生えた爺だと思ってたが、実際は全然違った。

「で何故、私が龍夜様が【星屑】である事を知っていたか……でしたよね？」

「ああ……教えて欲しい」

ゼウスはお茶（さっき飲んでみたら玉露だった）を飲み口を開いた。

「実はこの世界には私一人しかいないんです。一人じゃ寂しいのでどうしようかと悩んだ末に思い付いたのが人間界を観察すること、名付けて【人間ウォッチング】です。それを始めてから約2年の事でした。いつも通りに観察しているとある2人の女性の会話が聞こえてきたんです。

『最近さあゝニヤニヤ動画見てる?』

『見てる見てる! 【星屑】さあ、超良くない?』

『分かる分かる!』

『ねえ、帰って 【星屑】 見ない?』

『いいよ! じゃあ、早く帰ろう』

私は、その【星屑】と言うのが気になったんですが生憎、観察の状態ではパソコンを触ることが出来なかったんです。

私はどうしても見たくなり、人間界に降りることにしました。

私は、インターネット喫茶を使ってニヤニヤ動画に会員登録をして入りました。

ああ、インターネットの使い方は大丈夫です。観察の時によく見てましたから。

そして、私は【星屑】で検索してみました。

色々ありましたけど私は、

【J e s t b e f r i e n d 歌ってみたb y 星屑】を見ました。

……………凄い。

それが私の感想です。

もっと詳しく知りたいと思った私はこの世界に帰り【星屑】について調べてみました。

そしたら……龍夜様のお名前が出てきたのです。それがこちらです。

┐

ゼウスが差し出したのは一枚の紙。俺は、それを手に取り見た。

《【星屑】について……》

本名は二階堂 龍夜。大学3年生。父、母、姉と妹の5人家族。歌い手歴9年。弾き手歴9年。踊り手歴9年。ニヤニヤ動画では【万能】や【神に愛された人】、【師父】など呼ばれている。なお、他の沢山の歌い手や弾き手、踊り手と交友を持ち、ニヤニヤ動画ツアーなどの行事には必ず出ている。最近ではf a s tアルバムを出すことを自身のブログで発表していた。》

……………詳しいな。

俺は、紙をゼウスに返す。

そう言えば4ヶ月後に俺、星屑主催の【ニヤニヤ動画ツアー】星屑がやらねば誰がやる！】をする予定だったなあ。

「ちょうどその時でした。お茶を飲もうとしたら、手が滑ってしまい龍夜様の紙にかかって……」

「……俺が…死んだと……」

「……………はい…そうです」

ゼウスは申し訳なさそうに俯く。

ーポン

「へ？」

俺の突然の行動に驚いたのか気の抜けた返事をしたゼウス。

「気にしてないから、そんな顔すんな」

ーナデナデ

優しく頭を撫でる。

生前、妹が泣きそうになったときよく頭を撫でていた。

「…………ぐす……龍夜様……少し……胸をお借りしても……」

「ああ……好きなだけ使え……」

今の俺には慰めることしかできない。こんな時に気をきかせる事ができない自分が少し嫌になった。

ゼウスが泣き止んだのはそれから約1時間後の事だった。

泣き止んで落ち着いた時のゼウスの真っ赤になった顔が可愛いと思っただのは余談だ。

ところでゼウスだか、何か取ってくる物があるらしく今はいない。

ズズズッ……………はぁ……茶がうまい（只今、4杯目）。

「お待たせしました……これどうぞ」

「おお……ありがとう」

ゼウスの声のする方を見たらお茶菓子と白い紙の束を持ってきてい

た。
うん……………美味い。

「ふえ、ほのはみははんは？（で、その紙は何だ？）」

「あつ、はい。これですね」

へうすはへにほったはみほ（ゼウスは手に持った紙を）…ごっくん
……………ちやぶ台の上に並べた。

俺は、紙1枚を茶菓子の中のういろうと共にとった。

「……………へんせい？（転生？）」

「はい。今、龍夜様には2つの選択肢があります。1つ目がこの紙
のなからの1つに転生する事。2つ目は…わ、私と結婚する事です。

／／／／／／／／

……………どうしようか、俺は別にゼウスとの結婚が嫌なわけではない。
寧ろ結婚したい。まあ、一目惚れってヤツだ。
しかし、転生もしてみたいし……………そうだ！

「……………1つ提案が有るんだかお前と結婚して転生するってのはO
Kなのか？」

「ええ、出来ますけ……………け、結婚してくれるのですか!？」

身を乗り出してゼウスが聞いてくる。……………あつ、紙落ちた。

「逆に聞くが…俺なんかでいいのか？」

俺は落ちた紙を拾い上げゼウスに聞く。俺よりもいい男は5万といるだろうに。

「私は龍夜様に一目惚れをしたんです。龍夜様が何とっていいようにとも私は龍夜様だけの物になりたいのです。」

「…………その言葉に…嘘は…」

「ありません」

「……………そうか」

——ギョッ

「た、龍夜様！／／／／／」

俺はゼウスを抱き締めそして、耳元で囁いた。

「……俺と一緒にしてくれるか？」

「ッ！……はい」

ゼウスは涙を流しながら俺を抱き締めた。

プロローグ？（前書き）

ホントさゴメンね

プロローグ？

リリス（ゼウスの真名）と結婚して3年が過ぎた。この3年間でした事は、リリスと一緒に歌ったり、楽器を教えたり、一緒に踊ったりとかなり充実した生活を送れた。
お陰で歌スキルとかに磨きがかかった。

えっ？ 転生はどうしたかって？ ああ、それならするぞ。

ただ、転生よりも新婚生活の方が魅力的だったから、そっちを選んだだけであって…。

「龍夜様〜！ 準備出来ましたよ〜」

「ああ、今行く」

何の準備かって？ …………… 転生だよ。

————2週間前————

「転生? …… ああ、 あったなそんな話」

俺とリリースが向かい合って座るいつもの風景。

少し違う事といったら俺が珈琲を飲んでいる事ぐらいだ。(何時
もは玉露を飲んでいる)

「で場所は決まってるのか？」

「はい、一応は決めてあります」

リリースが俺に1枚の紙を渡す。 其処には、ISと書かれていた。

「IS? 何処だソコ」

リリースが渡してきた紙を見ても転生先がIS以外何も書いていない。

「私も詳しく知らないんですけど、男性より女性の方が位地が高いらしいです。所謂、女尊男卑の世界です」

女尊男卑……ねえ。まあ、行ってみるのも悪くないか。

「出発予定日は？」

「2週間後です」

2週間……か。能力の確認と修行……大丈夫だな。

「なら、準備出来たら呼んでくれ」

俺は、その場を立ち上がり奥のある空間へと進んだ。

———2週間後———

「龍夜様…準備はいいですか？」

オカルトチックな模様が敷き詰められている床の真ん中に立ってい

る俺にリリースが声をかける。

「……………いつでも」

「それでは……………ハッ！」

―ピカア！

床の模様から強い光がで始める。コレが、転生の儀式だ…知らないけど。

「じゃあ、リリース先に行ってるな」

「はい、行ってらっしゃい。私も後で追いかけます」

そして光が一段と強くなり…

――バシユ！

俺は……………転生した……………

オリキャラ設定（前書き）

短いから…ホントさゴメンね

オリキャラ設定

—転生前—

★二階堂にかいどう 龍夜たつや

★年齢……22

★体重……57?

★身長……178?

★性別……男

★髪の色……金色

★瞳の色……蒼

＊備考

神ゼウスのミスによって死んだ大学生。父が日本人、母がスペイン人のハーフ。姉は日本人寄りで龍夜と妹はスペイン人寄りである。インターネット最大動画サイトニヤニヤ動画の人気歌手兼踊り手兼弾き手。本人はソコソコの人気と思っているが先日、ファンクラブの人数が1500万を超えた。

――転生後――

★二階堂 龍夜

★年齢……25

★身長……178?

★体重……57?

★性別……男

★髪の色……金色

★瞳の色……蒼

★能力

とあるシリーズの一方通行の能力。

鬼巫女の能力。

＊備考

転生後の龍夜。転生前とあまり変わっていない。転生前と同じく星屑としてニヤニヤ動画で活動中。UPする時は狐の仮面をつけている。ファンクラブの人数が1550万を超えた。

世界有数の企業【八雲財閥】の副会長。

第1話（前書き）

文才ないから……ホントさゴメンね

第1話

俺が転生してから約10年過ぎた。

まあ、赤ん坊の頃からの転生じゃなくある程度、若返っての転生だった。

別に不自由ではない。義理とは言えど親はいるし、天災の親友もいる。

何より一番嬉しかったのがこっちの世界でもニヤニヤ動画があったことだ。しかも転生前と変わらない姿で。俺はまず、投稿するためにアカウントを登録しようとした……が驚くことに俺のアカウントは存在していた……たぶん……リリースだな。でもアカウントがあったお陰で苦労はしなかった。

ツアーも全部行ったし、生放送も月1で出ている。

実際、転生前と変わらない生活を送っているがな……

ちなみにリリースは2年ぐらいこっちで一緒に生活した後、遣り残した事があるらしくまた戻っていった。

——ブツラク○ロックシューター何処へ行ったの?——

l p i

「もしもs『やあやあたつくん!!元氣かな』……………っ!」

頭に響く声。俺は電話を耳から離す。電話を見るとそこには『

天災』と映っていた。

「……束か」

『せくかくいゝ★』

電話の相手は【IS】生みの親、篠ノ乃束。俺の親友であり、秘密を知っている数少ない人の1人だ。

「何のようだ？ ツアーなら後5カ月は無いぞ」

『ちっちっち。違うんだなあゝたつくん。』

「じゃあ何だよ」

バカにされた気もするが…まあ、いいか。

『テレビをつけてみてゝ』

俺は束の言うとおりにテレビ（八雲財閥製）をつけた。するとそこ

には……電話を持って手を振っている束と俺のよく知る2人の女性と1人の子供がいた。

『で本当に龍夜は見ているのよね束？』

『うん！もちろんだぜい、この天才束様には抜かりは無いよう！』

『…さつき思いつきり龍夜様に電話してましたよね』

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ z \\ z \\ z \\ z \\ z \\ z \\ z \\ z \\ z \end{array} \right]$$

金髪の女性が2人……1人は俺が副会長を務める【八雲財閥】の会長というかボス……八雲 紫。

もう1人は、俺の専属秘書というかお世話係……八雲 藍。

そして藍に膝枕で寝ているのが…八雲 橙。…………おいおい、八雲 ファミリー（俺とリリスを除く）大集合じゃないか。

『たつくん!?ちゃんと見てる?』

「……ああ……何してんだお前ら」

『見てたらわかるよ☆………せいッ！』

束がリモコン（何処から出したか不明）の真ん中にある赤いボタンを押した。

「……………ブッ！」

俺は、飲んでいた玉露を嘔いてしまった。……………仕方ないだろ。突然、俺の顔がテレビに出たんだから。そして束は大きな声で言った……………と言うよりも叫んだ。

『さあ！テレビの前の皆の衆！聞いて驚けえ！★コレが世界で2番目にISを動かした男だあ！★』

「あっ……………はあ、面倒だ」

最早、止める気もなかった。

今、止めてもいずれ束は言うだろう。それが、今日になっただけのこと。

はあ、義親父に連絡しないとなあ。そっちに世話になるって。

俺は、束からの電話を切り義親父へと電話をかけた。

俺の義親父…名は……………

轡木
十蔵

第2話（前書き）

文才ないよ……………
ホントさゴメンね

第2話

どうも龍夜だ。あの後、義親父と連絡がとれて義親父が直々に迎えに来るらしい。

何か、日本政府が俺を血眼になって探しているらしい。
無理だろ……だって、ここ

「アラスカだからな」

俺は、夜空の下で玉露^{ホット}を飲みながら義親父の迎えを待っている。おっ、オーロラ見つけ。

そう言えば義親父が電話で

『知り合いが手伝ってくれる』

とかいってたな……でも義親父の知り合いでそんな事できる人なんて……いた。アメリカ軍の大佐 ジェロム・ファイルス。あの人は色んな意味で凄い人だ。例えば、拳1つで車を破壊したり銃弾を捕まえたり、俺と会ったその日に自分の娘を嫁にどうだって言うてきたり……凄いや人て言うかチートだ……

——キイイイイイン

突然、後ろから機械音が聞こえた。振り返ってみると、そこには……VIP専用ステルス機能付きの飛行機にステルス戦闘機3台が飛

んできていた。

大佐エ…………金使いすぎだろ。俺が唾然としているのを余所に飛行機全てが着陸をした。

「よお、息子！元氣だったか！」

ハハハハハ…と豪快に笑う渋い男性。コレがアメリカ軍最強の人…
ジェロム大佐。
……………て言うか大佐

「誰が息子だ！誰が！」

「あゝあゝ？ナターシャじゃ不満だって言うのか！？」

さっきの笑みから豹変して物凄い形相になる大佐。
実は大佐、娘の事ナターシャになったら戦争を投げ出してでも駆けつける程の親バカだ。

「まあまあ、ジェロム落ち着ついて……………そして…久しぶですね龍夜君」

「ああ、義親父も元氣そうで」

大佐の後から降りてきた優しそうな雰囲気の男性。これが轡木十蔵

…………義親父だ。

義親父の歳は50歳なのにどう見ても30代にしか見えない……

「まあ、どうです？酒でも一杯」

俺の発言に2人とも笑みを浮かべた。それを肯定と受け取った俺は酒を取りに家へ戻ろうとしたとき……

「大佐！日本自衛隊がコチラに向かっているとの報告が！」

1人の兵隊（兵隊Aとする）がトランシーバーを片手に言う。

「何だと！！ステルス機能があ……………」

大佐は途中まで言いかけてピタッと固まった。

そして、兵隊A、B、C、Dと一緒に無言で全ての飛行機の見回り、大佐は言った。

「スマン……ステルス発動し忘れてた……………」

「……………（◎皿◎）！！」

「はははは」

上から大佐、俺、義親父だ。

しかし、義親父……『ははは』って、よく笑えるな。

「それより大佐！どうすんだよ！」

俺は大佐に言おうとするが、大佐はその場に居なく兵隊A、B、C、Dが俺に向かって敬礼していた。

―ガシッ！

俺はいつの間にか後ろにいた大佐にがっちりホールドされて……

「こうすんだよ！！」

―ブオン！

「おわあああああ！！！」

―ドオオン！

「ジェロム……もう少し優しく出来ないのですか…」

「ハハハハハ！アイツもそんな柔じゃねえから大丈夫だろ」

……飛行機の中に投げ込まれた………イッテエ………

第3話(訂正)(前書き)

h
o
n
n
t
o
s
G
o
m
e
n
n
e

第3話（訂正）

どうも、大佐の素晴らしい（悪い意味での）操縦で気分が悪い龍夜だ。

……分かるか？普通の飛行機よりもデカイ飛行機でアクロバット飛行される気分を……義親父なんて笑顔で気絶してたからな……

俺たちは今、日本の空港に。……貸し切り状態で
因みに大佐達はアメリカに帰った。大佐が帰りに『始末書がぁー！
！』って叫んでいたのは余談だ。

「あぁー気分ワリー」

「だ、大丈夫ですか？龍夜君」

義親父が青い顔でフラフラしながら訊ねてくる。

義親父は車とか陸上用の乗り物は平気だが飛行機や船など陸上を離れるとダメになる。

「うっぷ……トイレ行ってきます」

「あぁ……行ってらっしゃい」

……大丈夫かよ。

ふらふらとトイレに向かう義親父を見ながら俺はそう思った。

「あら、早かったのね」

透き通るような綺麗な声。

……俺はこの声の主を知っている。

「久しぶりね龍夜」

「よう、共犯者^{ゆかり}」

「……今、共犯者って言わなかったかしら？」

「心外ね、と言わんばかりの表情を見せる紫。俺は少し紫を尊敬してしまった。……何故かって？」

それは、束とあんなことしたくせにあんな表情を見せるからだ。

「まあいいわ。お義父様が来次第行くわよ」

「……なあ、本当に行くのか？俺IS…乗れないんだぞ」

俺はISに乗れない。絶対にだ。束が男に反応するISのプログラム（と言っても俺と織斑一夏だけらしいのだが）を発明し織斑一夏と俺に使ったのだが織斑一夏には反応し俺には反応しなかった。束が何度も何度も何度も何度も何度も：etc作り直したのだが結果はすべて同じ：俺には反応しない。

「貴方、生身でISに勝てるじゃない」

「……（何も言えない）」

確かに俺の能力を使えば勝てる。あれは、大佐に連れられて（拉致）アメリカ軍に行った時だった。

（その時ナターシャとはすでに交流はあった）何故かナターシャの親友というイーリス・コーリングと模擬戦する事になり、面倒だったからベクトル操作を使ってすべての攻撃を【反射】させて【キングクリムゾン】で色々した。その結果、イーリスが涙目になってしまい出来るだけ刺激させないように優しく接した。何故かイーリスの顔が赤くなってナターシャが不機嫌になって買い物につき合わせられたのは余談だ。まあ、能力使わないで戦ったら死ぬけどな（一時だけだね。俺、不老不死だし）。

「諦めなさい龍夜。遅かれ早かれこうなっていたのは確かよ」

「はあ…………レミィとフランに会いたい。会って癒されたい」

「相変わらずのロ r 「シスコンだ」…」それもどうかと思うわよ」

義妹は正義だ。そう思わないか？…………ん？キャラ崩壊？今更だ。

「いやいやお待たせしました」

「あら、お義父様。もう宜しいんですか？」

…………いいか？まず妹というのはな……………

「ええ、それより龍夜君はいったい何を…」

「大丈夫ですわ。私が連れて行きますので……………フン！」

それでな……………だか r (ガン！！) ……………

「それでは行きましょうお義父様 (ニコッ)」

「え、ええ」

その時、十蔵は思った……怖い……と。

ガンバレ龍夜！君の明日はもうすぐだ……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8139z/>

～IS～転生？蘇生させろ蘇生！

2011年12月31日17時48分発行